



知恵の樹

No. 172 2013. 1. 16

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

鶴川駅前図書館 開館までの裏ばなし

鶴川駅前図書館 菅谷繁男

昨年10月17日(水)、市内で7番目、町田市では12年ぶりの新館である「鶴川駅前図書館」が、「和光大学ポブリホール鶴川」の2階にオープンしました。床面積は1,190㎡、市立図書館では4番目の規模で、蔵書数約63,000冊を揃えてのスタートです。最終的には90,000冊収蔵の図書館になる予定です。

すすめる会をはじめとする、図書館を応援してくださる皆さんのおかげで、何とか開館にこぎつけられました。この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げます。柿の木文庫の皆さんにはオープニングイベントにもご協力いただき、本当にありがとうございました。また、オープンの日には、すすめる会より我々スタッフにお祝いの花束までいただき、改めて気合が入ったことです。ありがとうございます。

今回は折角ですから市の広報誌の記事とは少し違って、多少内輪の話をご紹介したいと思います。

図書館の職員がこの「鶴川駅前公共施設」の計画に参加したのは2008年のことです。ちょうど「基本構想」が完成し、「基本計画」を作っていく段階でした。

その後設計上の交渉などを経て、2010年度から図書の発注などの本格的な準備が始まりました。

図書館内で「新鶴川図書館開館準備プロジェクト」を立ち上げたのですが、実際にはそのための増員などは最近の市役所では無理な話。そのため、当時の今井係長をリーダーとして、実質的には鶴川図書館の職員が通常の勤務をこなしながら新館を立ち上げるといった、かなり大変な仕事でした。

本の発注だけでも2010年度に8,000冊以上、2011年度には32,000冊をこなしました。参考までに2011年度の中央図書館の図書の購入冊数が24,400冊です。小さな鶴川図書館の職員だけで、通常の図書館運営をしながらプラスαでこれだけの本を発注受け入れするということです。これは大変なものです。不肖私が今井係長の後に赴任した時には、もういっぱいいっぱいという感じで、「ほんとに開館できるのか？」という状況でした。

そんな時に、図書館先輩であり「すすめる会」の玉目さんが団地に様子を見に来てくださいました。

「進み具合はどうかね」と尋ねられて私は「どうもこうも、玉目さんとご一緒させていただいた中央館開館の時も厳しかったけれども、それ以上です。欲しい本も品切れや絶版が多くて、無事オープンできるかどうか分かりません」と答えました。すると「とにかく係長があわてちゃあいけない、部下が動揺するから平気な顔をしている。植木等じゃないけれど、そのうち何とかなるもんだ。何とかなるよ」と言って下さいました。

私は内心「そうC調にはいきませんよ…」と思いつつも、「確かにあわててもどうなるもんじゃない」と考えるのと何か少し気が楽になってきたのでした。

それから何日かして、玉目さんの紹介でうれしいご提案をいただきました。故松野係長の蔵書を鶴川駅前図書館に3,000冊も寄贈していただいたのです。さすがは松野係長のコレクション。更にその中から公共図書館に必要なものを玉目さんが選書して下さり、

我々が集められなかった基本図書が大量に揃いました。「図書館らしい」安定感のある蔵書構成になったのです。

字数の都合で詳しくご紹介は出来ませんが、本当に助かりました。精神的にもどれだけ安心できたか知れません。改めて玉目さん、松野係長のご遺族の皆様、そして故松野係長にお礼を申し上げます。

鶴川駅前図書館は、市内で初めての複合施設内の図書館。吹き抜けがあつたりカフェがあつたりとちょっと風変わりではありますが、2ヶ月半が経過した今、「新しいタイプの図書館」として、認知されつつあるようです。

まだまだこれからの図書館ですが、職員一同がんばってまいります。今後ともご支援をお願いいたします。
(鶴川地域図書館奉仕係長)

第14期 第14回 町田市立図書館協議会 報告

12/26(水)9:30~12:00、市立中央図書館6階ホール／全委員出席、館長欠席

議題に入る前に議事録の扱いについて議論。12回と13回分の議事録案を毎回修正の意見を出す委員がいるので、そのため発言内容まで微妙に変化するおそれがあることから、議事録については発言通りに記録するというを確認。

1) 館長報告 (代理 近藤副館長)

1. 嘱託職員:11月末で1名退職、新たに1名採用

2. 2012年第4回町田市議会定例会〈一般質問〉

斎藤祐善議員:デジタルアーカイブの取り組みを推進するべきでは／池川友一議員:和光大学ポプリホール鶴川について、開館してからの状況、トイレ・授乳室等の施設の改善、地域・団体との連携／殿村健一議員:視覚障害者が安心して暮らせるための対策について

3. 教育委員会報告

「2011年度町田の図書館」を11月に発行した。閲覧・貸出しができる。

文学館:「滑稽とペーソス～田河水泡“のらくろ”一代記」展 <1/19(土)～3/24(日)>

「三浦しをん『まほろ駅前番外地』ドラマ放送記念まほろの〈住人十色〉展」< ~3/31(日)>

翻刻『八重山吹』の刊行について、B5版 97ページ、定価 800円

4. その他

・障害者サービスにかかわる録音関連機器について／現状は、カセットデッキ9台デジタル録音機2台を持っている。朗読奉仕の人たちは、デジタル化への対応を早急にして欲しいと願っているが、図書館は計画を立てていく必要はあるという認識。朗読奉仕の人たちから意見を聞いていきたい。

・新年度に向けての嘱託職員の採用について／募集人員若干名、一次試験日 1月28日(月)。

・鶴川地域図書館の利用状況について／鶴川駅前図書館は川崎市民の登録が増えている。鶴川団地図書館は土・日には減少がみられる。平日はそれほどでもない。

・利用者アンケート／11月末から12月初めにかけて実施。

・図書館事業計画の進捗状況について／図書館側より、次回協議会が1月末なら出せるとのこと。

・町田市が行った市民アンケートのうち教育関係の結果は1月の教育委員会には出てくる予定。

・図書館職員研修についての報告は次回行う。

2) 協議事項

・2010年度図書館評価について／図書館側から「外部評価を受けての図書館の見解」が出たので、図書館評価プロジェクトチームと図書館協議会が意見交換をする。Ⅱの「基本を大切にしたい図書館」まで終了、次回は、Ⅲ「誰もが利用できる図書館」から進めるが、事前に委員長が論点整理し委員の共通理解としておく。

・市立図書館と学校図書館の連携については時間がなくなり協議できなかった。(玉目 哲廉)

「八王子市図書館の英断 地域資料が残った

(第15回多摩デポ講座一見学会)」に参加して 手嶋 孝典

はじめに

昨年11月16日(金)に八王子市中央図書館で開催された多摩デポ講座・見学会に参加した。この講座は、東京都立図書館が除籍した多摩地域資料を一括して引き取り、都立多摩図書館が所蔵していた多摩地域資料の散逸を防ごうとした八王子市図書館の英断に学ぼうという趣旨で開催された。私が理事及び事務局として関わっている特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩(以下「多摩デポ」)が主催するのは、当然の成り行きであった。

東京都立図書館は、2009年10月、都立多摩図書館が所蔵していた多摩地域資料を処分すると発表した。東京都市町村立図書館長協議会や「多摩デポ」は、処分(東京都立図書館は、都立中央図書館が所蔵しているので、「再活用」と強弁するが、多摩地域資料を一括して都立多摩図書館で所蔵していることが肝要)に反対したが、東京都立図書館は、方針を変えなかった。

そもそも、東京都教育委員会は、2002年1月に公表された『今後の都立図書館のあり方～社会経済の変化に対応した新たな都民サービスの向上を目指して～』によって、東京都立図書館の運営方針の見直しを行った。その一つに、都立図書館での「資料収集、保存は原則1点」とし、「重複して所蔵している資料」は、除籍して「再活用」することが明確にされていたのである。

八王子市図書館の英断

八王子市図書館は、2010年3月、東京都立図書館が「再活用」と称する除籍処分した多摩地域資料を一括して譲り受けることを決定した。そして、蔵書として受け入れた約1万7千冊を2012年8月15日から公開するに至ったのである。

この英断は、もっと高く評価されていると思う。かつて、町田市立図書館は、東京都立図書館の除籍資料約10万冊を全部引き受けると意思表示し、その内の約5万冊を2002年3月に引き取

った経験を持つ(「知恵の樹」169号、拙稿「都立図書館の後退の始まりから10年～共同保存・利用図書館について考える」参照)。その時は、多摩地域の公立図書館が共有して活用する方策を確立するまで、町田市立図書館が一時的に預かるという方針であった。分野の内訳は、0、3、4、5、6、7門及び地域資料であり、地域資料が含まれているとはいえ、一部に過ぎなかった。だから、八王子市図書館が一括して引き受けた多摩地域資料24,529冊を整理し、複本を除く16,981冊を散逸させることなく自館で公開したのは、意義が大きく異なる。八王子市図書館は、多摩地域資料を受け入れるため、中央図書館の蔵書17,000冊を廃校に書架を設置し、移管しているという点に注目する必要がある。自館の蔵書を他に移管してまで、多摩地域資料を受け入れたのである。

2010年2月の東京都市町村立図書館長協議会第4回例会で、八王子市図書館が一括して引き受けることを全会一致で確認しているにもかかわらず、館長協議会のバックアップは弱いように感じる。多摩デポ講座・見学会に出張扱いで参加した多摩地域の自治体は、2市にとどまった。

今後の課題

八王子市図書館の英断を今後に生かすには、どうしたらいいのだろうか。もちろん、今回東京都立図書館から引き取った資料の内、未整理の複本7,548冊の扱いを検討する必要があると思うが、基本的には、多摩地域の自治体に戻せば済むはずである。それよりも、今回公開された多摩地域資料の扱いについてである。八王子市図書館の方針は、①中央図書館の2階参考室での閲覧とし、館外貸出しは行わない、②他自治体の図書館からの借用依頼には、館内閲覧という条件を付けて、協力貸出を行う、③一部資料については、借用依頼があっても応じない、とのことである。現在の段階でこの方針に異議を唱えるつもり

はないが、①については、基本的には貸出しをして欲しいと思う。②、③については、八王子市図書館が対応するより、東京都立図書館の協力貸出しで対応すべきであろう。そうすれば、館内閲覧ではなく、館外貸出しが認められる資料(刊行後30年以内)も存在するはずである。

それ以上に、考えなくてはならないのは、今回の多摩地域資料については、既に述べたように、八王子市図書館が中央図書館の蔵書17,000冊を廃校に書架を設置し、移管した上で受け入れていることである。このことは、八王子市図書館が自館の蔵書のある程度犠牲にしたということでもある。だからこそ、英断という評価も生まれるのであるが、将来的には、このままでいいとは思えない。

なぜなら、八王子市図書館が今回受け入れた多摩地域資料は、刊行年という時間軸が固定されたコレクションであり、八王子市図書館が既に受け入れた、或いは今後受け入れる一般的な多摩地域の資料とは、別扱いの存在だからである。本来、このようなコレクションを保存し、活用するのは、共同保存図書館の仕事と位置付けた方が合理的であろう。我田引水が過ぎるとの批判もあるかもしれないが、共同保存図書館の必要性をますます強く感じた講座・見学会であった。

最後になったが、このような英断を実行に移した八王子市生涯学習センター図書館長の中村照雄さんを始めとする八王子市図書館の関係者の皆様に感謝の意を捧げたい。

(さるびあ図書館・会員)

嘱託職員労働組合第6回定期大会が開かれました

玉目 哲廉

11月29日(木)午後6時30分より、中央図書館6階ホールに於いて、自治労町田市図書館嘱託職員労働組合の第6回定期が開催された。

私は、昨年に続き本年も増山代表の代理で出席したので、その概要を報告する。

開会に先立ち木曾山崎の嘱託員が横浜市の司書採用試験に合格したとの報告が野角委員長より嬉しい報告としてされた。出席88名、委任状提出12名で総会は成立。

挨拶に立った野角委員長は、出席率が高いのはエネルギーの源であるといい。図書館運営プロジェクト全14回開催され、その内館ごとに10回、管理職と3回、28日の14回目の図書館運営プロジェクトで結論が出た。職員全体にはまだ周知していないが、時間的な都合で許可を得て、本日の定期大会で嘱託職員には話すことにした。

町田の図書館をどうすればいいのか。嘱託職員の処遇を含めた自治体の職場のあり方については結論が出ていない。図書館の事業計画は、

11月27日の市長と図書館長との話合いで予算に関する部分は白紙撤回となり、競争原理に基

づかないやり方はダメだという回答が出た。そのため地域法人は立ち上げないことになった。今後の状況は、より厳しいものになるだろう。執行部としても根本的な見直しをする必要がある。一人ひとりの頑張りも必要だし、行政内部に声を届けなければならない。また、2015年まではこのままでいくそうなので、各館係内会議でさらに詳しい話を聞いてほしい。今日を新たなスタートの日にしたい、とのことであった。

その後、2012年度の活動報告等が承認され、2013年度の活動方針等も承認された。

新役員の選出と旧役員の紹介があり、およそ3分の1が交代した。委員長は野角さん留任。

議事の中で、疑問・質問が出てこないのは日頃の活動が了解されている証明なのであろうか。経済的にも社会的にも恵まれない状況の中でよく頑張っていると思うが、町田市で同じような状況にある人たちとの連携と外への広報の必要性を感じた大会であった。

『新島八重 会津と京都に咲いた大輪の花』 を書いて

児童文学作家 国松俊英

昨年11月に、児童書『新島八重 会津と京都に咲いた大輪の花』(フォア文庫・岩崎書店)を出しました。新島八重は、ご存知の2013年NHKの大河ドラマのヒロインです。

八重は、江戸時代末期の会津藩の武家の娘として生まれ、幕末から明治維新の激動の時代を全力で生き抜いたたくましい女性です。戊辰戦争では、スペンサー銃をかついで会津鶴ヶ城に入って籠城し、城を取り囲んだ新政府軍と果敢に戦います。八重が生まれて育った時代と会津藩という環境を考えると、とても破天荒な生き方をした人でした。戊辰戦争後は、京都に行って兄と再会し、目が不自由になっていた兄の仕事を助けます。そのかわり英語や聖書を学び、キリスト教信者となります。そしてアメリカ帰りの新島襄と出会って結婚しました。夫と兄とともに、同志社の基礎を築いたのでした。新島襄が亡くなった後は、日本赤十字社篤志看護婦として活躍しました。

前に「知恵の樹 157号」に「お江」を書いた時のことを載せてもらいました。大河ドラマの主人公の人生を子ども向けに書き始めたのは、3年前の「坂本龍馬」からです。坂本龍馬という人物に前から興味を持っていて、いつか児童書で龍馬の生涯を書きたいと思っていて、その企画を児童書出版社に持ちこんだところOKとなり、文庫版で出してもらいました。私は龍馬だけで終わるつもりだったのに、編集者に熱心にくどかれて翌年の「お江」も書きました。そしてつぎの年の「平清盛」も書くことになり、なんとなく毎年大河ドラマの主人公を書くことになってしまったのです。

2013年の主人公は、なんと私が4年間学んだ同志社大学を創立した新島襄の奥さん、新島八重になりました。その連絡を受けた時、これはい

いと思いました。八重を通して、新島襄のことも少し書けるし、同志社が創立された頃のようにも書けるからです。



新島八重については、2009年にNHKで放映された歴史秘話ヒストリア「明治恐妻伝説 初代ハンサムウーマン」番組を見ていました。それは明治維新後、京都に行ってからのことです。八重が、会津若松で過ごした子どもの頃や、娘時代のことは何も知りませんでした。資料収集と調査を始めて何十年かぶりに、同志社大学の図書館に行って勉強しました。

会津若松にも行き、町を歩き、市立図書館で現地ならではの資料も読みました。

調べていって驚きました。江戸時代の終わりにこんな生き方をした女性がいたのか、なんと波乱万丈の人生を送った人だろう、と思いました。お江を書いた時も感じたのですが、世の中にはとてもドラマティックな人生を送った人がたくさんいます。八重もそのひとりでした。

私が書くのは、小・中学生向けの本ですが、大人の本と比べても負けないように、きちんと調べて正確に記述しなければいけないと言い聞かせています。幕末の時代というのは、日本各地でいろんな動きがあった時です。そうした歴史の背景をわかりやすく書くように心がけました。『新島八重』では、会津藩がどのような事情で京都守護職の引き受けなければならなかったのか、どうして戊辰戦争が起きたのか、といった事柄を子ども読者にもわかるように、特に気をつけて書いていきました。ぜひ読んで下さい。

新島八重の物語が、大震災でふるさとや大切な家族を失くされた方々に、生きていく勇気や希望をあたえてくれたらうれしいと思います。(会員)

町田市職員組合合同支部が、団体加入

一 図書館に対するいろいろな要求をしていく組織が必要、ということで、浪江先生を中心に10回の準備委員会を経て、1984年4月24日に「町田市立図書館をよりよくする会(以後よりよくする会)」を発足させ、2か月後の6月に町田市職員組合合同支部が正式加入しているが……。

手嶋:組合内部での議論が続いていたため2か月後の加入となったが、準備段階から関わっていた。1982年1月に浪江先生を助言者に第1回地方自治研究集会を主催し、分館の日曜開館をめぐるということで市民と話し合った際、組合としては日曜開館をやること自体に反対しているわけではなく、これは労働条件の問題で、職員体制が取れば決して反対はしないという説明をした。では一体何人職員の増員が必要なんだ、と言われて、その時に腹案として持っていた数を示したら、市民の方からそんな数を出すということは最初からやる気が無いと、お叱りを受けた。自治研が終わった時に私が桃沢さんに握手を求めたら拒否をされたという(笑)語り草が残っているが、相当お怒りだったようだ。

桃沢:当時の大下市長に話をすると、「私もやりたいたんだけれども組合の意向があつてね」とおっしゃってたものだから、組合の意向ということは手嶋さんか！となりまして、手を引っ込めた(笑)。

手嶋:地域文庫の方たちの運動で、青山市政の末期に町田の図書館はかなり発展した。それを引き継ぐ形で、最初は大下さんも図書館に力を入れていたが中弛み状態になってきた頃、その自治研集会から2か月後、テコ入れするために、「町田市立図書館と市の図書館政策とに関する要望書」を市長他宛に浪江先生が出した。自治研をきっかけに、市民と組合、図書館が、定期的に話し合いの場を持ちたいということで、組合は準備会の段階から話し合いには関わっていた。ただ組合内部では、市民の意見を全部取り込まなければならなくなるのではないかと、組合の主体性が損なわれるのでは、という意見が根強くあり、

国レベルの見解で、図書館は委託や指定管理者制度は馴染まないと言われながらも、あたかも流行に乗り遅れないかのごとく自治体直営の図書館が消えていく。

図書館を企業に委ねた自治体の市民は、直営で図書館運営をしている我々町田市民を羨望の目で見て、「図書館に理解のある首長で良いわね」という。もともと公立図書館は、社会にとって必要とされるものは公が担うべきであるという市民運動から生まれたものである。

特に町田の図書館は、浪江虔という主導者の運動に呼応した多くの市民の力によって発展してきたもので、市民が行政に委ねた図書館なのである。だから、行政は、決して企業やNPOに委ねたりは出来ない。それは歴史の後戻りとなる。後戻りをさせないために、まずは、町田の図書館発展の歴史を多くの人に知らせようと、会は企画された。

前号に続いての報告である。(進行:増山)

組合は組合の立場としてきちんと臨み、市民の意見もちゃんと聞いていこうよと、ということでかなり議論していたので、「よりよくする会」に正式加入したのは、発会2か月後になった。

一 発足してからも、自治研町田市職員組合主催の「町田市立図書館の明日を考える」や「三多摩図書館問題交流会」に参加、多摩市関戸図書館・厚木図書館を見学するなどの研修を重ねながら図書館協議会設置要望についての学習をすすめ、1年後の3月に1744名の署名を添えて「図書館協議会設置に関する請願」を提出する。その後も市議会の傍聴、図書館協議会条例・規則について学習、定例教育委員会を傍聴するなどして、精力的に活動を展開していき、その年の8月に町田市立図書館協議会が設置される。よりよくする会からは、浪江・桃沢・吉住(故)の3名の方が委員に委嘱され、市民が図書館政策に関わる糸口を作った。桃沢さんの場合、活動の原動力は、どこから？

桃沢:親子読書会活動での図書館との関わりもあるが、私の場合、公民館が渋谷清視さん等、児童文学のエキスパートを講師にずっと分野別の講座を開いてくれ、親子読書会で選書などをする時に大きな力になった。わかりかし古めかしい汚い公民館だったが、内容はすごく良かった。一流の講座を開いてくれ、受講した読書会の会員たちが力になって、図書館にもいろいろ発言していくことが出来たと思う。

一 その公民館には、今日出席の大石さんが職員としておられた。私事だが、すすめる会より1か月早く

「まちだ語り手の会」を発足させたが、その際も、図書館には受け入れてもらえず、公民館が講座を開いてくれることにより、多くの仲間とスタートさせることが出来、今日の活動につながっている。社会教育主事として公民館で自立した市民を育ててこられた大石さんですが、当時の事を・・・。

文化の土台を育てる行政の役割

大石：私はちょうど玉川学園の文庫の活動と相まった1971年に、非常勤職員として町田で働き始めた。入ってすぐに浪江先生という方がおられるからと、お目にかかりに行ってお挨拶した覚えがある。とにかく戦前からの運動家であり、教育家であるということで、社会教育学会とか全国社会教育推進で一緒した。職員が安心して働けるようにいろんな意味で職場の上層部の方たちに先鞭をつけて下さった。住民主体の学習をどのように支援していくかというのが私の課題であったが、その時桃沢さんに出会って、いろいろな活動を教えてもらった。最初の仕事は、専門職だからと第一中学校を会場に開講していた成人学校の担当になった。当時は、工芸だとかスポーツだとか絵画だとか趣味の講座が中心だったが、桃沢さんから、文庫活動を広めて親子読書を前進させていくためにはこういう学習が必要なのよ、という要望を受けて児童文学の講座をやらせもらい、渋谷清視さんを講師に招いて連続7回から10回の講座を開講した。公民館の仕事、社会作りの仕事を始めたときに元々社会教育が地域の学習活動を支援する事を狙っていたし、住民運動の学習的側面であるという仕事をするのが社会教育職員の大事な仕事だと考えていたことと、それが公民館全体で受け止める土台があったのはやはり浪江先生のご助言があったから。しかも増山さんが当時全国組織の語り手の会に入っていたとか、玉川学園で桃沢さんと読書会をやっていたといういろんな講座の知識を持っておられた。そうした住民の活動に私が学んで、私自身が成長させていただきこのような運動を創ったんだと思う。そういう公民館の、町田市の市政、市民を大事にする大下さんの市政、それが職員にも息づいていた。だから特別なことではなく、講座企画のために増山さんや桃沢さんと一緒に専門家の所を訪ねたりして、本当に共に作ってきたっていう・・・。

一 既に市民との実のある協働をやっていた・・・。

大石：下請けではなく、行政職員が市民に依託されて仕事するのが自治体公務員の仕事だと思っていたから。私本当にいい時代に仕事が出来たと思う。市民を豊かにするのが自治体職員の仕事であったので、自信を持って仕事が出来たが、今の職員たちは権限といふかなんと申すかそこまで幅広く動いたり、市民と直接関わって一緒にという事が出来難くなって、むしろ市民を啓発して市民の力を使っていかに安上がりな行政をしていって事が狙われて…。公民館も有料になってしまって、自前で勉強しなさいって、本当に文化の土台を育てる行政の役割がどこかに行っちゃったのかなって心配している。

一 町田では、公民館の自主婦人学級で育ったグループがかなり多い。自立したグループが多いのは公民館での働きがあったからで、ただ部屋を貸せば良い、というのとは違う。行政が市民の学習を支援するって事はとても重要なことだと思う。

大石：自主婦人学級、男女共生社会を作っていくためのベースになるような事業を自分たちでつくりたい、そのために、公民館事業として実施して新たな会員を募集して・・・、は公民館が1館しかないものだから、逆に本当に市民に助けてもらって事業展開できた。小難しいことをいつも研修されてしんどかったと思うが、とにかく背に腹は代えられないって感じて知る機会を捉えては、図書館の大切さだとか、子どもの本の語りの意味とかを深く学習していったことが運動の力になったのではないかなと思う。自主婦人学級、今の男女共生学級、なんかそれが今年からなくなったそうで…。何かとあの当時は、公民館保育室を創って欲しい、自主婦人学級の予算を増やして欲しいとか市民の請願がいっぱいあった。

桃沢：浪江先生に、陳情ではなくて請願権があるんだから請願をしなさい、ということも教えて頂いた。

一 よりよくする会が請願をして図書館協議会も設置され、次は中央図書館設置に向けて学習を重ねて、要望書提出し、1990年には中央図書館が開館する。少し時代をさかのぼって、図書館の70年代はどうでしたか？玉目さんが図書館に入られたのは？

玉目：47(1972)年に町田の市役所に入って最初の配属が図書館だった。司書の資格を持っていたので兼任辞令が出ていたが、その時に司書職で採用されたの

は僕と松野さんとそれから 1 年後に入った内藤さんの3人のみで、この 3 人には兼務辞令が出ていた。それ以外の司書資格を持っている人は一般行政事務で配属されており、その頃(1970 年代)は、美濃部都政の時代で、町田でも専門専任の酒川館長を就任させるなど大下さんが市長として図書館に力を入れており、移動図書館を一台ずつ増やしていた時期でもある。移動図書館が増えるに伴って、職員も増えていて、最終的に僕らの後ぐらいまではかなり人数が増えていた。

— 金森、木曾山崎と分館も開館…。

図書館が動き出す

玉目:1972 年のこの青焼きの資料では、町田市の図書館計画の中では細かなサービスができるということで12館作るようになっており、東京都の図書館政策よりも6館ぐらい増えている。ただ当時の図書館の規模というのは450平米とか300平米とかで小さかったが、そういう風に計画作りから始まって1972、73年あたりに貸出とか除籍するための基準を決めていく要領・要綱とかの土台を次々と1975年ぐらいまでの間に作っていった。

— それには市民の要望等は？

玉目:それは図書館内部の仕事の仕方の取り決めだから、職員が作る。町田の職員というか仕事のあり方として、まずみんなで決めようということがあって、課内会議だとか全体会議という名称で、次に図書館が何をしようかという事について担当が原案を出しそれを何回も検討しながら最終的には成案にしていっていった。だから青焼きの資料には、案がみんなくっついており、案を検討して良ければ最終的に館長が決済して仕事をするということになっていた。その頃は酒川さんも30代後半だったからバリバリエネルギーがあったんだと思う。割と議論をしながらいろんなことを決めていった。

— そうしたやり方は町田の図書館の特色？

玉目:たぶんその頃のやり方の一つだったのではと思う。上から指示していくやり方と下からボトムアップしていくやり方があると思うが、町田の場合はみんなの意見を要約しながら仕事を進めていく方向性があったと思う。

— では、市民の動きは図書館員には分からない？

玉目:いいえ、例えば桃沢さんが酒川さんを訪ねて来られたとき等は、必要な職員に対してこの人はこういう人ですと紹介されていた。

桃沢:私も微かに覚えている。玉目さんに紹介されたこと。

— 図書館が動き出したときに、図書館に期待を持つ市民がそこにおいて、少しずつ接点が出来てきた。

玉目:やはり市民のリーダーがいたという事と、それを受け止める図書館の器があったという事だと思う。町田の場合は、働く側も市民と接点を持ちながら図書館をどうしていこうかと両方がかみ合いながら進めていった。だから日曜開館についても確かに人数的な論点の違いはあったかもしれないが、どうやったらそれが実現できるんだろうという事で話し合うことが出来た。

桃沢:人数を増やさなければ労働超過になってしまうという話をきいて、人数を増やして欲しいという請願も市民からしている。その中に職員は出来るだけ多く司書職・専門職を入れて欲しいという事も併せて請願事項として出している。

山口:伊藤さんは、先に文庫活動していて、それからよりよくする会に関わるようになった？

伊藤:そうですね、文庫は54(1979)年の9月から始めました。その頃桃沢さんや吉住さんに文庫関係の団体を集めて話し合う集まりで出会って。

玉目:移動図書館の担当が、地域文庫の担当を兼ねていて、年に1回か2回文庫関係者に会議の招集をかけていたことから、すすめる会にも関わるようになったのではないですか？

山口:文庫に対してバックアップをする、その関係で図書館について考えなくてはいけない、または関わっていかなくちゃならない、という思いでしたか？

伊藤:中央図書館設置運動にも関わりました。何が何だかわからないまま、図書館協議会委員にもなり、浪江先生とか片岡さんとかと一緒に。そして、文庫仲間と1986年に「町田読書会文庫連絡会」を立ち上げた。中央図書館の開館時には、文庫連でタペストリーを作って贈呈した(現児童フロアにある「てぶくろ」のタペストリー)。その頃は玉目さんも文庫連の会議には出席してくれて、新しく入った本を紹介してくださっていた。

— まちだ語り手の会にも職員が何名か会員になってくれて、玉目さんは会報の印刷を引き受けてくれるなど、非常に協力的な図書館員だった。

山口:話をもどしますが、伊藤さんはよりよくする会、すすめる会とずっと初期からの主要メンバーとして活動してきて、文庫活動もされている。文庫を立ち上げた時の思いを持っておられると思うが、それと図書館を考える市民運動を継続してきたバックボーンというか、よりどころは何でしょう？

伊藤:せめて町田に10館欲しいということで、協議会でも図書館10館構想を立てた。しかし、長い間図書館をといいながら、未だに成瀬には実現できないでいる。成瀬に図書館が出来るまで、子どもたちの身近に本のある場所をという思いでずっとやってきた。
— 地域で子どもたちと本を結ぶ活動をされて30年以上、その時代の流れで思うところは？

伊藤:46年(1972)に町田に来て子育てをしていた時は、図書館が遠かったので、移動図書館を利用して。当時娘が通ってた学校が定員いっぱいになって移り、その跡地をどうするかPTAで話が上がって、お母さんたちは図書館が欲しいと声をあげたが、旧5ヶ村にこだわって、そこには図書館があるからいらないということで、跡地には成瀬センターが建てられた。その一部屋を文庫にということで、半公共の建物の中の恵まれた一部屋で始まった。図書館から団体貸出でたくさん本を借りて、当時担当の地域対策室の方もすごく協力的で10年くらいは上手くやってきた。しかし、そのあと市民協働推進課に担当が移り、いつ頃からかセンターの一部屋に文庫があるということが、何ていうか居心地が悪くなってきた。

— 文庫活動を良く理解していない。

伊藤:そうですね、担当する人によって変わるというのが、私たちがどうしていいのか分からないという感

じで。市から派遣されている受付の人も文庫のことをとてもよく理解して一生懸命して下さる方と全く知らない方とで、例えば鍵を開けるにも、取りに來いとか開けられないから頼みにいったら自分でやれみたいな事があって、時々協働とは何だろうと思うことがある。上手く協働していこうといいながら、何かあった時責任はどっちにするかみたいな事も言われた事があって。子どもが壁を傷ませた時もかえで文庫さんの責任だから弁償しろ、といわれた事もあって非常に驚いた。新しいセンターになるために協働課が青空学童さんの狭いお部屋をやっと借りてくれて仮住まいをして文庫を開いているが、来年からそこも使えなくなる。すると来年からは自分たちで探せと言われ、今図書館の方をお願いしてる所で、いろんなことで悩んでいる。昔は一緒にバザーを開いて地域に呼びかけて基礎的な資金作りを一緒になって考えてくれたり、書架も全部入れてくれたりしたんだけど、今は立場があやふやというか何か寂しい感じ。

桃沢:この会は利用者と働く人が幸せなことに一つのテーブルで話し合える、そういう場が持たれていることで、素敵なことだなんて思う。「そうだ、京都行こう」ってキャッチコピーあるじゃない。私の場合は、一人暮らしになって、「そうだ、図書館行こう」って、それで雑誌コーナーの辺りに座って、喫茶店もあるしね、本当に図書館は宝物だなんて思う。無料で。しかも若かった先達たちが皆偉くなって、次々に館長さんになって。伝統をその時々守って、図書館をずっと支えてくださって。こうした図書館が続いて欲しい。

70、80年代の図書館を巡っての話は、行政側も市民も互いに信頼し協力しようという前向きな姿勢が報告されました。今、行政が謳っている市民協働が真の協働になるためには、職員も市民も意識改革が必要では、と思う学習会でした。未完成な報告となりましたが、今回は参加者の声をお届けします。(文責:増山)

第2回 まちだ・としょかん・こどもまつり ~本は友だち~

3月28日(木)~31日(日)

10 市民団体と町田市立図書館で実行委員会を組んでの図書館まつりです。

期間中、中央図書館6Fホールと4Fおはなしの部屋を借り切って、今回は木曾山崎図書館も加わって、おはなし会の他、ワークショップ、わらべ歌、岩辺泰吏氏によるアニメーション、後路好章氏による赤ちゃん絵本の講演会、中学生による語り、等々、盛りだくさんで楽しい4日間の図書館まつりを行います。詳細は、2月初めごろ図書館等に配布のチラシをご覧ください！



ひろば

11/21(水)18:00~20:00

中央図書館中集会室

16:30~171号印刷(伊・玉・増・丸・桃)

出席者:石井、伊藤、久保、齋藤、清水、玉目、手嶋、増山、丸岡

例会報告

12/19(水)18:00~20:00

中央図書館中集会室

出席者:石井・伊藤・齋藤・玉目・手嶋・長谷川・増山・丸岡・桃沢・守谷

2012年度 第11回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

2月21日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム (通算68回)

- * 町田ゆかりの作家「高見沢潤子」前田久美子
 - * 「ホレおばさん」(グリムの昔話) 増山正子
 - * 「雪太郎」(新潟の民話) 望月裕子
 - * 「驟(はしり)雨」(藤沢周平作) 利根川加代子
- 直接会場へどうぞ! 無料 保育有

(町田市民文学館 ☎042-739-3420)

●図書館協議会報告(玉目)

第12回<10/30(火)>, 第13回<11/20(火)>

●浪江文庫の資料が鶴川駅前図書館に移ったことについて議論/協議会の議題として出なかった/10/23(火)「利用者の声」で質問、浪江文庫を鶴川駅前図書館に移す件は、前館長時代から検討していたので、図書館側はそういう認識だった、との回答が来た/今年度、地域資料担当と鶴川駅前図書館担当と管理職とで最終決定/鶴川は浪江先生の農村図書館の発祥の地ではあるが、浪江先生を顕彰するのは鶴川だけではなく町田全体で顕彰すべき。職員間で議論がない、図書館協議会にもかけないことは問題だ/全部を移すのではなく、中央図書館に浪江文庫コーナーがあることは大切ではないか。貴重な資料は中央に置くべき、等。

- 図書館運営について/「新しい公共」案が出ているが先行き不安。行政側は経費節減が目的で、現実是指定管理や民営化に動いている/労働契約法の改正(5年以上の契約職員を正規の雇用契約にする)を自治体の非常勤にも適用すべき。現在の嘱託員制度を続ける方策を考えていかなくては/近隣の図書館では調布が進んでいる。司書職で採用しているので、全国から優秀な人材が集まる。結果、図書館サービスがよくなる/直管でやるべき。調布のように嘱託職員が正規職員になれるような制度を作れないか/職員のこともあるが、市民にとってよい図書館、よいサービスが受けられる運営形態とは何かを探っていきたい。

広瀬恒子さん講演会

「どの本 読もうかな?」

~子どもの本 2012年 新刊本から~

年間3千冊も出版される子どもの本。その中から、子どもに手渡したい本を紹介してください。皆さんお待ちかねの講演会です。

3月10日(日)13:00~17:00

町田市立中央図書館6Fホール

- 学校図書館問題/図書指導員の現在の身分(1週間で4日間、1年間140日、1日2000円)で続けているのは難しい。他市の条件がいいので、辞めて移っていく人が多い。IT化についても教育委員会で一斉に予算化して導入するというのではなく、校内の予算でやる人がいれば実施するというもので、学校図書館がどうあるべきか、というビジョンが示されていない。教育委員会に質問しても答えがない。この10年間で、公共図書館側は理解して支援してくれたが、肝心な教育委員会には、各学校で問題がなければそれでいいとして理解がない。今後協議会でどのように検討されていくか期待したい。

- 11/20(火) 神奈川の図書館を語ろうー日本図書館協会神奈川のつどい 2012(玉目参加報告)/「学校司書」法制化の動向、法案は先送りになっている。日図協学校図書館部会の望ましい法制化の見解は専任・専門・正規で配置されている学校司書。現状の全国学校司書の配置率→小中学校 50%を越え、高校を含めると48.5%。学校司書の養成が必要...日図協が学校司書の専門性を高めるコースを作る。司書+学校の教育課程(児童心理など)を設けて養成し、学校教育に対する理解を高めていく。

- かねて文庫/9月末に文庫まつりをした。多くの子どもたちやそれを支えるお母さんたちが集まってくれたが、文庫に対する理解が地域の中であまり得られていない。今後の文庫の行き先が決まらず先行き不安。

【あとがき】サッカーチームFC町田ゼルビアの本拠地町田市立陸上競技場に、3月に完成し12月に解体した仮設メディアセンターに市が2億6千万円を支出したのは違法だとして、石阪丈一市長に弁償を求める「住民監査請求」を一市民が出した。本日1月16日、その意見陳述が市役所6F監査事務局で行われるというので聞いてきた。市に予算がないという現状で、教育・文化関係など大幅な削減をしている中、いくつもの法に違反した今回の支出は決して許されるものでない。「ならぬものはならぬ」、監査員の見識を信じて結果を見守りたい。(M4)

